序

ここに十五名の錚々たる研究者のご協力を得て、論集『藤原彰子の文化圏と文学世界』を刊行する運びとなりましたことは、編者一同このうえない喜びとするところです。

今、彰子サロンの文学活動・文化活動をあらためて考えなおそうという機運が高まっています。昨年刊行された『新時代への源氏学4　制作空間の〈紫式部〉』（竹林舎、二〇一七年）は中宮彰子サロンの文学活動と紫式部との関係性を考究した論考を多く掲載し、彰子文化圏と文学世界の重要性を知らしめました。紫式部はいうまでもなく時代を超越した存在ですが、その才も所属した文化圏との関係抜きには語ることはできません。また一昨年刊行された『知の挑発　平安後期　頼通文化世界を考える―成熟の行方』（武蔵野書院、二〇一六年）は、藤原頼通の文化世界を多角的に考究したものでしたが、頼通の文化世界も彰子の文化世界なくしては成り立ちえず、相互乗り入れ的な性格を持っていました。

藤原道長の文化世界・文学活動を考えるうえでも、彰子サロンが重要な位置を占めていたことは言うまでもありません。『源氏物語』『紫式部日記』『御堂関白集』『栄花物語』など、その成立に深くかかわったと考えられる作品群にとどまらず、彰子に仕えた女房たちの私家集、彰子の周辺で催された歌合や歌会、あるいは対立軸となったサロンで作られた作品、強い影響を受けて作られた後代の作品、また漢文学や漢文日記、絵画に至るまで、彰子文化圏との関係やサロン内での享受を検証することで、新たに豊潤な世界が立ち現れてくるのではないでしょうか。

さらに彰子の政治的な関与や、後代にその女院としての軌跡が規範とされたことなどが歴史学の領域から明らかになりつつある現在、彰子の文学活動・文化活動をあらためて考える必要性は増大しているように思われます。近時、

朧谷寿氏によって『天下第一の母　藤原彰子』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）という本格的な評伝が刊行されたのも、そうした機運のあらわれでしょう。

本論集はそのような研究状況に対応すべく、本テーマや周辺領域をめぐって貴重な提言を公にしてきた諸賢に執筆を依頼しました。特に編者から細かな標題は指定しませんでしたが、執筆者は編集意図を汲み、実に多様にして、それぞれのテーマを深めた、最先端の研究成果を披瀝した論考をお寄せくださいました。このような論集を編集できたことは編者一同の誇りとするところです。執筆者各位に重ねて御礼申しあげるとともに、細やかなご支援をいただいた武蔵野書院社長前田智彦氏、編集担当福澤香南美氏にも心よりの謝意を表したいと思います。

本論集の刊行により、彰子文化圏とその文学・文化活動に一層注目が集まり、さらなる研究の活性化に繋がることを編者一同願ってやみません。

二〇一八年九月

桜井宏徳
中西智子
福家俊幸